

#### 第四章 河越館の夏一旅立ち

郷子が、義経の正室に入ることが伝わると周囲は大変な騒ぎになった。

義経といえば、いま都で最も注目を浴びている人気者である。

都の人々が、この英雄を寄ると触ると噂の種にして、その一挙手一投足に注目が集まっている。義経が都大路を馬で通ると、その勇姿を一目見ようと十重二十重の人垣が出来て身動きもならないという。

義経には、噂の種になる要素が多い。

祖先に清和天皇の流れを汲む源義朝と千人の美女の中から一人選ばれたという美女の中の美女、常盤との間に生まれた源氏の嫡流である。清盛が義朝を破った際に、常盤のあまりの美しさゆえに自分の妾になることを条件に義経を殺さずに鞍馬山に預けたという。義経は、鞍馬山を脱出して、奥州藤原秀衡氏の庇護の下に育った。武蔵坊弁慶という荒法師などの取り巻きを従えて、頼朝の挙兵に参画。戦をすれば、大將軍として宇治川の戦いで木曾義仲軍を破り、いち早く入洛し、幽閉されていた後白河法皇を助け出し、お褒めの言葉を賜ったという。

その後すぐに平家討伐に向かい、鶴越という絶壁を三千騎で駆け下り、十万といわれる平氏を破り海上に追いやった天才的戦術家。

いまは、後白河法皇や貴族のために都の警備に当たっており、法皇や貴族の覚えもめでたいという。

そして、いま都で最も人気のある白拍子静御前との恋愛騒動。

このような都の情報が、都下りの武士や商人や伝令や馬売りなどの口から口を経て東国までもたらされる。都の情報に飢えている地方の大衆は農作業の合間にお茶を飲みながら、あるいは井戸端でそんな噂話に熱中して時間を過ごすのである。

義経の噂話は地方の河越までやってくる。しかし、それはいかに興味深い話でも遙か異国での雲の上の出来事に過ぎない。ところが、お館の長女郷姫さまが、その都で評判の義経の正室になるという目の前の現実となったのであるから、村で大変な騒ぎとなったのも、おかしくないであろう。

郷姫のことは、その幼少の頃から村の誰もが良く知っている。

春は、田んぼで泥だらけになって蛙を捕まえたり、田螺を集めていたりしていた。夏は入間川で泳いだり土手から飛び込んだりしていた。秋には、舟遊びをしながら釣りをしている姿を見かけた。冬には、雪の積もった土手で板切れを尻に敷いて滑っていたこともある。すこし成長して馬に乗れるようになると、乗馬に熱中するあまり遠出をして迷子になり大騒ぎになったこともある。

弓を引いて矢を飛ばすし、木刀も振り回す。場合によっては、組討も仕掛ける。

館の外でやっていることは、ほとんどが男の子の遊びで、日に焼けて色黒で、河越館のおてんば姫と呼ばれていた。

ただ、館の内にいる間は母から礼儀作法と読み書きを厳しく躰けられていた事は、村の者はあまり知らない。

郷姫が義経の正室になるという噂が初めて流れた時、ほとんどの村人が「冗談だろう」と言って、信用しなかった。

まず、郷姫がいわゆる花の都の華やかな人気者が娶るであろう花嫁から連想する優雅な姫君とはあまりにもかけ離れた類型の女性であること。

それと、郷姫の父河越太郎重頼と長兄の小太郎が義経の家来であることだった。

清和源氏の嫡流の血を引く武士貴族が、絶世の美女ならともかく、まだ会ったこともない家来の娘をはたして正室として受け入れるだろうか。村人の常識ではまず考えられないことだった。

義経は、後白河法皇や公卿の覚えも良いという噂から、上流貴族の美しい姫君を正室にすることは可能なのではあるまいか。また仮に、武家の娘との縁談にしても、河越氏より数倍も有力な豪族は、あまたいるであろう。それがどうして、よりもよって、河越館のおてんば姫が義経の正室になれるのか。村のものが初めに眉唾な冗談と受け取ったのも無理は無かった。

しかし、この噂が本当らしいとの情報が流れると、村は朝から夜までどこへ行っても郷姫の話で持ち切りとなった。

当然のことながら、郷子を取り巻く環境も四圍の人々の対応も激変した。

河越氏の主君の正室という立場上、館の中でも最も大きい父が使用している部屋があてがわれるべきとの論もあったが、郷子が強く固辞したため、嫡男の小太郎が使っている部屋に移ることになった。父母も小太郎も不在のため、婚礼のために京に向けて出発するまでの一時使用という名目で、郷子の反対も押し切られた。

食膳の高杯も客用の模様のついた漆塗りのものに代えられ、兄弟の一番上席に置かれた。郷子は、そのようなもろもろの特別な取り扱いを好まなかったが、郎党や侍女や下僕はともかく兄弟までもが、郷子に対する特別な扱いを当然のこととして受け入れていることに驚きを禁じえなかった。いままで何かというと憎まれ口をたたいていた綾姫までが、尊敬の眼差しで姉をみて、丁寧な言葉使いをするのには、驚きを通り越して呆れてしまうほどだった。いままで空気のように体に馴染んでいた館の雰囲気が変わって、まるで、他人の館に重要なお客として滞在しているような堅苦しさと意心地の悪さを感じた。

弓や刀の稽古にしても、今まで厳しく叱っていた指南役が何をやっても「お見事」と褒めてくれたすぐ後で、万一怪我でもしたら大変と稽古を差し止められてしまった。

ただ、乗馬だけは、控えるように説得されても、郷子は絶対に譲らなかつた。

このような郷子を取り巻く四圍の変化は、館内に止まらなかつた。

郷子が、日課の朝駆けをする頃になると、どこからともなく物見櫓の門の前に大勢の農民が集まって、都の英雄の嫁になる我らが地元の姫君を一目見ようと三日月の前に殺到したため、郷子が乗馬を諦めて館に引き返せざるを得ないこともしばしば起きた。また、少

女の集団が、門の外で声を合わせて「郷姫さま！郷姫さま！」と何回も叫ぶので、兄に促されてしかたなく物見櫓に上がると、それを見た少女達が一斉に「義経の北の方さま！」と歓声を上げるのだった。

郷子は、自分の身に一体何が起きているのかわからずに戸惑うばかりだった。

自分は、何一つ変わっていないのに、義経の正室になるという話が伝わった日を境にこの自分を取り巻く環境が激変したことをどう理解したらよいのだろう。

[義経]という英雄の[人気]という目に見えない恐るべき影響力に圧倒されるばかりだった。そして、この[義経]の[人気]という無形の化け物に最も懸念を抱いているのが、頼朝であり、郷子が義経の正室として、送り込まれる所以なのだ。

郷子は、本能的にもう元の自分には戻れない運命を感じ、それに従って生きるより他に道はないものと覚悟を決めたのだった。

郷子は、館の外に出て騒がれるのがいやなので、必然的に館に居ることが多くなったが、その時間の大半を小さな持仏堂で過ごした。

持仏堂には、阿弥陀如来の像が掲げてあり、その前に祖先の位牌が置かれている。父の重頼や兄の小太郎は、出陣する前には、この堂に籠って念仏を唱え、戦勝と身の安全を祈願するのが常だった。

また、戦から帰って来た時には、何よりも先にまず、持仏堂に入って無事に帰還できたことを深く感謝して拝礼するのだった。

持仏堂での拝礼は、祖先を供養するための年中行事としても行われたが、その際には狭い堂の中に家族一同膝を付け合わせて座り身動きも出来ないほど窮屈だった。

父の唱える念仏は、子供には退屈で、早く終って解放されたいとそれのみを願っていた時期もあった。

しかし、義経の正室になることが決まって、自分の意志とは無関係の所でおこっている四囲の変化と騒動を考えるにつけ、己を超越した運命というものの存在について、思いを至らさざるを得ないのだった。

いまは、父も兄もそういった己を超越した運命というものに対して、ひたすら念仏を唱えていたということが判る。

郷子は、あと十日ほどで、館を出発し、鎌倉に立ち寄り、母の居る比企谷殿に滞在し、比企尼やその養子の比企能員や娘婿の安達盛長などと会う手はずになっている。その後、頼朝さまや政子さまにご面会することになるのかどうかはまだ知らされていない。

郷子の嫁入り衣裳や道具などは、全て鎌倉の比企尼と母で準備するから身一つで来ればよいとの連絡があったから、とりあえず河越館で準備することはあまりない。

当時は、近隣の結婚で嫁の家に婿が入るのが一般的だったから、郷子のように、地方から遙か遠くの都まで旅して嫁に入るような輿入れは例外中の例外といっていだろう。

郷子は、持仏堂で正座しながら、懐から二通の小さな書状を取り出した。

今朝ほど、侍女の志乃が届けてくれたものだ。志乃は、その書状を郷子に渡す時に、意味

ありがたな笑みを浮かべていたから、このところ、夜のうちに館に投げ入れられる文だろう。一通は、表に郷姫さまと書いてあり、もう一通には、京姫さまと書いてある。まずは、郷姫さまと書いてある三つ折の書状を開いた。

いまさらに恋ふとも姫に、逢はめやも、知らぬ恋は苦しきものぞ

署名はない。郷子は、つい可笑しくなって笑ってしまう。どうせ、古歌から適当に引用して作っているのに違いない。誰かのいたずらではないか、自分ばかりかわれているのではないかと疑ったりもする。ただ一方で、郷子は、お館の姫君として、いつもみんなの注目を浴びていた。乗馬をして村を駆ける時に、若い男から見つめられていることも意識していた。しかし、それは、男女間の恋とは無縁の単なる好奇心の反映だと思っていた。ただ、若い男は、郷子が義経の正室になるという遥かにかけ離れた存在になったために、安心して自分の気持ちを密かに伝えようとしているのかもしれない。

噂が伝わった日以降、似たような恋文をもう何通も受け取っている。

例え古歌からの引用にしても、和歌を知っており、書体もまずまずであれば、すくなくともここら辺りでは、かなり知性がある人物といえるだろう。

郷子は、このような恋歌をありのままに受け取ることにした。

誰からも思いを寄せられなかったつまらない女として嫁ぐよりも、若い男から数多の思いを寄せられながら、嫁ぐほうが義経さまに臆する気持ちも弱まるだろう。

比企尼が言った言葉を思い出す。

「あなたはどこに出しても恥ずかしくない娘ですよ。それに、いまは全くお化粧をしないようだけど、もっと磨けばずっと綺麗になりますよ」

郷子は、その恋文を脇に置くと、次に、京姫さまと書いた書状を開けた。

わたしたち郷姫さまをみかづきの君とよんでました。みかづきという馬にのった美しいおうじさまということ。でも、これからは、京姫とよぶ。京のみやこでお姫さまになれるので京姫。みやこからくる京姫のうわさがとてもたのしみ。

これは、書体の稚拙さから年若い少女が書いたものだろう。

郷子は、自分が年若い少女達から美しい皇子として見られていたことを初めて知った。大人たちは、河越館のおてんば姫といていたが、少女達はそんな私を美しい男子に見たててくれていたのだ。物見櫓に立った時、少女達が一齐に「義経の北の方さま！」と歓声をあげたことを思い浮かべた。

郷子が、物思いに耽っていると、重時が入ってきて腰をおろした。

「大分日焼けが取れてきたな。京につく頃には、色白になっていよう」

「そうでしょうか」

郷子は、自分の手を見るがあまり変わり映えしてない。

「髪も長くなっていよう」

「・・・・・・・・」

少しは、長くなっているだろうが、それが自分の容貌に大きな影響を与えるとは思われなかった。

「ところで、鎌倉へは、牛車で行くことになった」

「牛車ですか？」

郷子は、牛車でのろのろと進むのが好きではなかった。

「お館の姫君が嫁入りするのに、まるで出陣するかのような騎馬姿ではおかしかろうということになった。だから、母上がいま鎌倉に持参して使っている牛車をこちらに運んでいる最中だ。もう二日も経てば到着するだろう」

（出陣するようなものだわ）と郷子は思う。

「まあ、牛車に乗っているのが退屈ならば、出発と到着の時に牛車を使い、途中で馬に乗り換えたらよかろう」

郷子をよく知っている重時が助け舟をだす。

「そうします」

「それから、父母と兄が不在の間、私がこの館を守らなくてはならないから、鎌倉までは、三郎重員が指揮を取る。三郎の他には、若い郎党二人をつける。鎌倉までは、近いしあまり危険な箇所も無いから警護はこの程度でよいだろう。雑用をする下僕が一名。荷物を運ぶ牛車が一台に、食料を運ぶ牛車が二台、これに必要な牛飼いがお主の牛車を加えて都合四名、食料は多いが、これは、京までの食料は、河越から持参してくれといわれている。道中、不作の影響を受けて食料の調達が出来ない恐れがある。さらに、食事の世話をする下婢が二名、それに侍女の志乃が付き添い、都でも世話をする」

「そんなに大勢で行くのですか」

「いやいや、これでもまだ足りないくらいだ。それで、鎌倉から都までは、兄の小太郎が郎党十人を伴って京から帰って来て、指揮を取ることにになっている。

また、比企のほうからも、数名出すとのことだ」

「そんなに大げさにしなくてはならないのですか」

「なんといっても、東国武士団の棟梁である頼朝さまのお声かかりで、いまや都でも大評判の弟君、義経さまにお興入れするのだから、万一のことがあれば、大変な不始末になる。万全を期すためには、これでも少ないくらいだと思っている」

出立二日前になると、子供の頃仲良く遊んでいた同年代の女子十数名が送別会を開いてくれた。ほとんどが、郎党の子女だが商家や名主や農家の娘も混じっている。

子供の頃、入間川の土手で遊んでいるうちに自然に出来た仲間だった。

その頃は、親の身分は関係ないから遠慮も無く無邪気に遊んでいたが、年がかさんでくる

と次第に親の身分が微妙な影を落として、すこしずつ疎遠になった。

特に、郷子は、弓や刀や乗馬など男子のする稽古に熱中してきたのと、やはり館の姫君ということもあって、疎遠にならざるを得なかった。

ただ、そうした中で、長老の九兵衛の孫娘の可奈とだけは、その後も親友付き合いを続けていた。可奈は、顔も体も手も足もすべてが丸々と太っている。軽口を叩き駄洒落を飛ばし人真似がうまく、底抜けに明るかったが、どことなく知性を感じさせるものがあった。そして、とにかく、人の世話をするのが大好きでそのための苦勞をいとわなかった。

今回の送別会も、可奈が子供の頃の仲間の伝を使って集めたらしかった。送別会の場所もお館では、気詰まりなので、昔遊んだ入間川の土手に筵を敷いてすることになった。みんな郷子と同じ年頃だが、もう亭主もちの女も五、六人はいるらしかった。乳飲み子を負ぶった女も二人ほどいる。

郷子は、昔の仲間を見渡した。女も十四、五歳を過ぎると急に全体がふっくらして顔も体型も髪型も変わってくる。太ったのもいれば、背が伸びたのもいる。色っぽくなったのもいれば、所帯じみたのもいる。昔通り髪が短いままのものもいれば長く伸ばしているものもいる。外形は、変っているが、しかし、みんなどことなく昔の面影が残っていて、見分けられないものは一人もいなかった。

みんなは、持ち寄った小さな餅や、野菜の煮物、漬物、蒸かした芋、小魚の干物などを摘み、近くの名主の家から持ってきたお茶を飲みながら、初めは、ぎこちなく話した。

可奈が座を和らげようとしきりに言った。

「今日は無礼講よ。みんなで遊んだ子供の頃の話をしましようよ」

それで、みんなは子供の頃を思い出して、すこしずつ話し出すと、すっかり忘れていたその頃の遊びがそれこそ汲めども汲めども記憶の底から湧いてくるのだった。

入間川で男も女も素裸で遊んでいた話、飛び込んで頭をぶつけて泣いた話、浅瀬に魚を追い込んで取った話、人の死骸が流れてきた話、誰かが溺れそうになって大騒ぎになった話、夫婦喧嘩で母が怒って川に捨てた貴重品をもぐって見つけた話、大水が出た時の話、田んぼで蛙や田螺を取った話、畑から瓜を黙って取ってきて食べそれが後で分って怒られた話など話題が尽きなかったが、そのうちに当時の子供に戻ったように全員が打ち解けてきた。誰かが甘酒を持ってきていて、皆で飲もうということになった。全員の茶碗に甘酒を溢れさせて、可奈の音頭でみんなで一斉に飲んだ。郷子も飲んだ。それから、その頃一緒に遊んでいた男の子の話になった。その頃の男の子の評価といまどんなことをしているかひとしきり話題になった。もう結婚して子供を持っているものもいたし、そのうちには、ここに参加している女子の亭主もいた。亭主もちの女は亭主の悪口を言いながらその実たくみに惚気たりしている。甘酒も進んでくると、そのうち、いよいよ夜這いの話や男女のむつまじごとまで話が進んでいく。

この時代、都の貴族社会ほどではないが地方でも一般的に性に対する倫理観は低いうえ、この年頃の女子は、性に対する関心が特に強い。

郷子は、酔った勢いで武士の妻で子持ちの比較的親しい友達に三善康信から聞いたことについてそっと訊ねてみた。

「出陣の前と戦から帰った後では愛し方が違うんですって」

「そういえばそうね」と新しい発想に取り組むかのように空を見てしばらく考えてから言う。

「戦に行く前は、もうがむしゃらに突っかかってくる感じかな。わたしは敵じゃないのよ言いたいくらい。それから、もうこれが最後かというように朝まで離さないのよ。そんなに疲れて大丈夫かと思うけれども、わたしも夫の気持ちがわかるからできるだけ応える様になっている。帰ってきたときは、やさしいわね。私の体をいつくしむように撫で回してやはり朝まで離さないの」

このおしゃべりな子は、明け透けに話す。

（結婚している女は恥じらいの心が少なくなるのかも知れない）と郷子は思う。

可奈が、くだけすぎた話を元に戻すように言った。

「ところで、みんなは義経さまのことについてどんなことを知っていますか」

誰も本人の実像を何一つ知らなかったが、尾ひれのついた噂話だけはよく知っていた。

「僧になるように鞍馬山の阿闍梨に預けられていたのに、お経も唱えずに夜な夜な天狗に刀の稽古をつけてもらっていたそうよ」

「比叡山で修行していた荒法師の弁慶が、千本の刀を集めようと通行人を襲い九九九本集めて、あと一本というところで、五条の大橋で義経に負けて、家来になったんだって」

「清盛が放った間諜のかむろに密告されそうになったので、鞍馬山から奥州平泉に逃げて、藤原秀衡に匿われたでしょ。でも、奥州に逃げる途中で盗賊などに襲われて大変な苦勞をされたそうよ」

「頼朝さまが、富士川の戦いで、水鳥の羽音で逃げ出した平維盛に勝った時に、奥州から駆けつけた義経さまと黄瀬川の陣屋で感動的な涙の対面を果たしたということよ」

「それからがすごい。宇治川の戦いで義仲軍を破ったでしょう。その後、幽閉されていた後白河法皇を助けだし、お褒めのお言葉を頂いた。ついこないだは、鴨越を三千騎で駆け下りて、十万の平家軍を破ったから、都でも英雄扱いされて大人気だとか」

さすがに、静御前のことは、誰も口にしなかった。

可奈が一段と声を張り上げる。

「そんなすごい義経さまに、正室として嫁がれるのが、ここにいる我らが郷姫なのです」

みんなが割れんばかりの拍手をして歓声をあげる。

「郷姫ご挨拶を」と可奈が郷子に促す。

郷子は、立ち上がって、思いつきで話す。

「皆さん、今日は私のために集まっていただき有難うございます。

妹の綾姫がわたしのことを『いかず後家』といって馬鹿にしました。

わたしが、男に人気が無く、恋文も貰ったことがないというのです。

みなさんの中にもそう思われている人が多いと思います。

しかし、そんなことはありません」

郷子は、懐から最近貰った恋文を何通か取り出して高く掲げた。

飲み慣れない甘酒ですこし酔っていた。

「これは、最近館に投げ入れられた恋文です」

笑い声と拍手が起きる。郷子は、恋文の一つを開ける。

「では、読みます。

霞みたつ、入間の川瀬のさざれ波、止む時もなし、我が恋ふらくは

署名はありませんが、このように河越館のおてんば姫を慕ってくれる片思いの男は沢山いるのです。

この殿方達にはたいへんお気の毒ですが、私は義経さまの正妻になります。

私は、義経さまを愛し、支え、子供を生んで、一生添い遂げるつもりです」

郷子が、そう宣言して座ると、笑い拍手のなかに

「郷姫！すてき！」という声援が飛ぶ。

可奈が、代わりに立つと、みんなの興奮を手で制した。

「では、わたしが今様を歌いますから、八重さん舞をしてください」

すると、名主の娘の八重が立ち上がって、準備していた扇を取り出した。

可奈と八重で予め打ち合わせをしていたのだろう。

可奈が、節をつけて歌いだし、八重が男舞を舞う。

きみをはじめて見るおりは

千代もへぬべし郷子姫

おまえの池なる堀川に

鶴こそむれいて添いとぐる

可奈は、丸々とした体格をいかして腹の底から響くような声で朗々と歌う。

八重は、細身の体にゆったりとした袖の長い白絹の単衣を着て、扇を持った手の袖をひらりひらりと前後左右に上げ下げしながら舞う。

遙か西の山霞みに赤錆色に輝く太陽が沈むところで、あたり一面が茜色に染まっている。

八重の浮遊する白絹の袖もその茜色を映して美しい模様を描き出す。

この頃になると、送別会の話聞きつけた、村の若い男女や子供達、農夫や商家の家族が続々と入間川の河原に集まってきた。

誰かが焚き火を起こし、周りに幾本もの松明を立てた。

河越館では、義経と郷子の婚約については、父母も長男も不在で、婿もないことから祝宴をしないことに決めていたが、このような騒ぎになると放つても置けないので、急遽大量の御酒を差し入れ

ることにした。

酒が入ると、太鼓や鉦や笛が用意され、皆が輪になって踊りだした。

その輪も次第に広がって年に一度の夏祭りに負けないくらいの規模になった。

賑わいの中、雨がポツリポツリと降ってきた。

送別会にでていた友達が一人二人と抜けていった。

侍女の志乃が、迎えに来て、郷子に帰宅を促したが、

「主役の私が抜けるわけにはいかないでしょ」と断った。

そして、とうとう可奈と八重も郷子に

「出立の日には見送るからね」と言い残して帰っていった。

送別会の仲間が全員帰って、郷子一人になった。

しかし、踊りの輪は一向に衰える様子が無い。

郷子は、館に恋文を投げ入れた男子が現れることを期待して、それとなく見回した。

近くに来る男子はいなかったが、お酒を飲みながら、ちらちらとさりげなく視線を送ってくる若い武士がいた。顔は知っているが名前は思い出せない。

とうとう、兄の重員が迎えにきた。

「もう十分だろう。こういう場合は、主役は早く引っ込んで良いのだ。

そのほうが、みんな無礼講で楽しめるだろう」

その時、雨がザーと本格的に降り出した。

郷子は、立ち上がると館に向かって走りだした。

出立の日が来た。

郷子は、早朝まだ暗いうちから河越館の裏門から抜け出ると、入間川の畔にある義高の土饅頭の前で黙祷をささげた。

懐には義高の大姫さまに宛てた恋文が入っている。

(この文は、鎌倉に着いたらどんなことがあっても必ず大姫さまへお渡しますから、ご安心ください)

郷子は、心の中で誓った。

館に戻ると、館内のどこもかしこも出立の準備でごった返していた。

鎌倉から戻された河越氏の九曜紋がついた網代車の長柄の頸木には、もう牛が繋がれている。

その他、荷物用の牛車と二台の食料用の牛車も、既に積み込みが終わって牛が繋がれるところだった。

三郎重員は、侍烏帽子をかぶり、直垂を着て、腰に太刀をさし、各所に遺漏の無いようにしきりと指示を出している。

重員と同じような服装をした若い郎党二人も、重員と自分達の乗る三頭の馬と郷子のために曳いて行く三日月を準備していた。

郷子は、自室に行くときすばやく旅姿に着替えた。唐草色の単衣の上に桜色の素地に鮮やか

な浮紋をつけた桂をからげ、山吹色の懸帯を胸にかけたつぼ装束だ。

義高の恋文が懐にあることを確かめると、中庭に出て行った。

中庭には二郎重時を中心にして両脇に四郎重方と綾姫が並び、その後に長老の九兵衛はじめ一族郎党および下僕や下婢が全員揃って郷子が出てくるのを待っていた。

郷子は、重時の前に進み出ると丁寧に一礼した。

「大変お世話になりました。行ってまいります」

「道中気をつけてな。重員には、身に代えても守れとあってある。

館の者だけではなくこの地のすべての領民が、お主の門出を祝っているぞ。

もう、この館に戻ってくることは、あるまいから、みんなおてんば姫の見納めと寂しく思っていることだろう。義経さまの正室としての心構えは、父上から話があるだろう。

父上は、嫁に出した以上、もう他人だということかもしれないが、わたしは、血の繋がった兄だ。何か困ったことがあったら遠慮なく相談してくれ」

「有難うございます」

兄の温かい言葉は、心に響いた。

「お姉さま、とてもお綺麗ですよ。お幸せになってください」

綾姫が、殊勝らしく言うので、可笑しくもあったが、なにか他人行儀のような気がした。

そこで、郷子は、綾姫の顔の前でしかめ面をすると、ペーと舌を出した。

綾姫は、一瞬驚いたが、すばやく反応して、同じく郷子に向けてペーと舌を出した。心の繋がったふたりは顔を見合わせてにっこり笑った。

弟の四郎重方は、あいかわらず口が重くてなにも話さないが、その目には暖かい色が宿っている。郷子は、そんな目に軽く頷いた。

九兵衛が、みんなを代表して

「おめでとうございます。ご多幸を祈念いたしております」

と挨拶して、礼をすると、後ろに控えていた全員が頭を下げる。

重員が、合図をして、自分の黒鹿毛に乗ると、郎党二人もそれぞれの馬に騎乗する。一人が、三日月の手綱を持っている。

牛飼いが、自分の曳く牛車の前で控えている。下僕も下婢も荷物用の牛車に乗った。

郷子は、侍女の志乃がつぼ装束の旅姿で市女笠を持っているのを見て驚いた。

徒歩で行くつもりなのだ。

郷子が、志乃に「私と一緒に網代車に乗ってください」と言うと「いえいえ」と遠慮する。

でも、「あなただけ歩くわけにはいかないでしょう」と咎めると

「それでは食料用の牛車に乗ります」と返事する。

郷子は「道中一人だと退屈なので、同乗して欲しいのです」となかば押し込むようにして志乃を網代車に乗せた。網代車は、外見でみるよりも内部は予想外に広く二人乗っても十分な余地がある。

全員の出立準備が整うと、正門が開けられた。驚いたことに、正門の前には数百人の領民

がこの出立を見ようと押しかけていた。

志乃が、郷子が外から見えるように牛車の後簾を持ち上げる。入り口近くに可奈や八重をはじめ、送別会に集まった女友達が陣取っている。郷子は、みんなに手を振った。可奈は、目にいっぱい涙をためている。それを見ると郷子の胸が突然締め付けられるような感動に満たされ、涙が後から後から溢れてきた。

「おめでとうございます」「お幸せに」という歓声の中で「郷姫！がんばって！」という可奈の声がひととき大きく聞こえてくる。

涙でぼやけた目に河越館と領民の姿がすこしづつ遠ざかっていく。

重時が言うように、ここに戻ってくることは、もう二度とないかもしれない。

その時、可奈のいう「郷姫！がんばって！」という意味が判った様な気がした。

この河越館を中心とする河越領は、郷子にとって母の胎内にいるのと同じだった。家族が領民が、郷子を包み込むように全ての外圧から守ってくれていた。

今初めて、その胎内を出て、新しい空気に触れて、自立して一人で歩いていかななくてはならない。そして、可奈は、郷子に「がんばって」生きていけと励ましてくれているのだ。

郷子は、（可奈、ありがとう）と心の中で呟いた。